

1 キャリブレーション(Calibration)

2 fsQCA では、元のデータを、0-1 のメンバーシップ値 (membership score) に当てはめ
3 る操作のことを指す。工学や自然科学の分野では、キャリブレーションは、既知の値の
4 試料 (例えば標準分銅、標準試料、ブロックゲージ等) を用いて、測定器の感度を調整
5 することであり、この用語の使い方は QCA 独特である。QCA では、「キャリブレーシ
6 ョン」のやり方に、決められた方法はない。分析者が自らの判断で決める。分析者の判
7 断で入力データの値を調整する行為は、チューニングと言うべきである。これは大変危
8 険で、慎重に、一般的に納得される決め方でやらなくてはならない。データの属性によ
9 って、チューニングには様々な方法が考えられる。数値データの場合には、正規分布を
10 仮定して、累積確率密度をメンバーシップ値とするのが一つの方法である。その場合で
11 も、チューニングとして、累積確率 0.50 のポジションを操作することが、しばしば行
12 われるようだ。その妥当性は、いくつかのチューニングの方法との比較によって確認す
13 べきだろう。5 件法や7 件法のリッカート尺度を用いたアンケートの回答の場合にも、
14 平均値と標準分散を使って、累積確率密度を計算する方法も考えられないわけではない
15 が、そうすると、どちらでもないという中立的な意見のポジションが、0.50 にならない。
16 この場合は、分析者の判断で、メンバーシップ値を割り振るのが現実的であるが、恣意
17 的に操作しているという印象は避けるべきだろう。例えば7 件法の場合、強く賛成する、
18 賛成する。どちらかと言えば賛成する、どちらでもない、どちらかと言えば反対する、
19 反対する。強く反対するに対して、賛成の度合い、0.95、0.80、0.65、0.50、0.35、0.20、
20 0.05 を割りふる。5 件法の場合、強く賛成する、賛成する、どちらでもない、反対する、
21 強く反対するに対して、0.90、0.70、0.50、0.30、0.10 を割り振るなどが考えられるが、
22 もちろん、分析者の判断によって、間隔を調整しても良いが、その場合にも、その必要
23 性と妥当性をしっかりと説明すべきである。

24